

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390700052		
法人名	株式会社中央介護センター		
事業所名	グループホームあさひ 1F		
所在地	〒028-0014 久慈市旭町10-66-1		
自己評価作成日	令和5年8月11日	評価結果市町村受理日	令和5年11月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ユニットの理念として、『思いやり』を掲げています。思考や言葉使い、行動全てにおいて思いやりを持って対応する事で、一つ一つのケアが丁寧になり、ケアの質が高まると考えています。
 年々、利用者が重度化し、介護の質と量が増えている事もあり、褥瘡対策に力を入れています。皮膚の状態を観察し、保湿や体位交換等の除圧を定期的に行っています。また、皮膚の状態の変化は、朝夕の申し送り情報共有し、隣接する施設の看護師にも相談できる体制を取っています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、三陸自動車道久慈IC付近に位置し、県立久慈病院が近傍にあるという利便性に優れた環境にある。また、同会社が運営するグループホームと小規模多機能ホーム、居宅介護支援事業所などが一体的に配置され、お互いが良く連携しながら複合施設的な運営がなされている。コロナ禍のために施設内の行事や外出機会などが難しい状況となっているほか、車椅子利用者の増加などにより重度化も進んでいる中において、職員は利用者が日頃の暮らしの中で不安やストレスを感じないよう工夫を凝らしてケアに当たっている。新たに示された津波浸水地域に対応した避難訓練も実施し、災害に備える意識の高さが伺えるほか、運営推進会議には町内会長や新たに地域の民生委員なども加わり、地域との連携交流活動を進めていく意欲が感じられる。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年9月20日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型の考え方などは折に触れ話す様になっている。ユニット理念である「思いやり」を持って対応する事で、一つ一つのケアや業務が丁寧になり、利用者だけでなく、職員間にも良い循環に繋がりたいと考えている。	理念は各ユニット毎に、職員自身が話し合っで定めたもので4年目となっている。1Fは「思いやり」、2Fは「明るく、楽しく、穏やかに」というシンプルで分かりやすいもので、年度初めに見直しを含めて話し合うが、当面は継続することで職員間で共通理解している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	直接的に地域住民との交流は日常的に行っていない。9月の秋祭りでは、地域の神輿や子供神輿が慰問してくれている。(毎年)	近隣に住宅が少ない地にあり、町内会には参加していないものの、今年は祭り子ども神輿がホームに来てくれたり、音頭挙げが披露された。事業所前を走行するJRのイベント列車に利用者が手を振り、列車からは「いつもありがとう」と列車の窓に掲げてくれるなどの交流も行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	通常は、運営推進会議を通して地域の方へ取り組みを伝える様にしている。 民生委員の方に協力を依頼。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を開催している場合、会議の内容については、施設内の会議やユニット会議に反映している。	昨年度後半から参集開催としており、委員構成は新たに加わった民生委員の他、町内会長、消防団員、地域包括支援センター職員などと、バランスのよい構成となっている。地域との連携を進めるうえで委員の存在は大切なものと捉えており、活発な意見交換ができるよう心掛けている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは、運営推進会議に参加してもらっている。また、地域包括支援センターとも困難事例があった場合等に連絡を取りあっている。	運営推進会議には地域包括支援センターの職員が参加しており、事業所の状況を把握しているほか、日頃から情報交換や相談等でお世話になっている。市の介護保険課からは、要介護認定申請などで支援をいただいている。なお、入居している生活保護受給者にケースワーカーの来訪が無く、少し気になっているとしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月の会議(連絡会議やケア会議)にて、身体拘束について議題にしている。また、年に1回は施設内研修で身体拘束を取り入れている。	身体拘束適正化委員会は運営会社として開催し、各グループホームと小規模多機能ホーム等から施設長、管理者等が集まり毎月開催している。職員研修はユニット会議と併せて年2回ほど開催している。スピーチロック対策が課題となっており、利用者への声掛けをさん付けの苗字で呼ぶようにすることを励行している。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	介護職員へは、資料や報告書を配布、内容周知に努めている。虐待防止については、毎月ユニット会議に合わせて行う研修会で、年1回研修内容として取り入れている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去、実際に成年後見制度を適用したケースが他ユニットであった為、その内容は共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、ご家族宅へ訪問又は来所して頂き、十分に説明を行ったうえでやっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月に1回施設長、管理者、ケアマネが集まる会議(連絡会議)を行い、話し合いの場を設けている。	利用者は重度化が進んでおり運営にかかる意見等は聞き出せない。家族とは利用者との面会が再開され、来訪時に職員も面談してお話を伺えるようになった。家族からは利用者の生活状況やケアの内容に関する話題が多く、運営についての意見はあまり聞かれない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回各ユニットでユニット会議を開催し、現場からの意見を吸い上げ、連絡会議(施設長、管理者、ケアマネ等出席)にて検討している。	毎月のユニット会議において、職員からは様々な要望や意見が出されている。働きやすい職場環境等に関して職員アンケートを実施したところ、人間関係や休憩時間などについての要望が出された。これらをもとに、勤務時間の変更などの対応を行っている。職員との個人面談も予定している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境・条件の整備に取り組んでいる。 今年度は、アンケート調査の実施、個人の目標や職場に対して求めるもの等を対象に調査した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ユニット会議に合わせて、短時間の研修を毎月実施。 今年度は、アンケート調査の実施結果をもとに、評価しフィードバックを予定している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者やケアマネ等を中心に、地域の他の事業所との情報交換は行う様に心がけている。 相互訪問などの実施は行っていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ケアマネのアセスメントやケアプランを中心に本人の状態や意向の把握に努める。その後は、担当職員とケアマネを中心に、月1回のユニット会議内で入居者様の様子や変化等を話し合う時間を設け、情報共有に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申請時の相談を受け、更に利用前に自宅(病院)へ訪問、本人、家族との面会等を行い再度意向要望を確認。その情報をまとめ情報共有を行った上で利用開始して頂くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族が必要とする支援に関して他のサービス利用を視野に入れる必要がある場合は、最初に併設している事業所の可能性を考慮する。さらに、他の事業所も含め他のサービス利用の選択肢も家族へ都度提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人ができる事は維持できる様に支援している。また、利用者様同士の人間関係(トラブルや言い合いもある為)を居室やユニットの移動を行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在は、事前連絡を頂き、別室での面会を実施。他の面会者同士が重ならない様に配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	隣接する事業所と交流する事で、夫婦での利用(夫GH、妻多機能)や同級生同士の交流も生まれている。	隣接の小規模多機能ホームを同級生や配偶者が利用しており、出かけての交流を楽しむ利用者がいる。理容については、月1回の訪問理容があり、新たな馴染みとして楽しみにしている。近所へ出かけての買い物などは、コロナ禍のために控えて以降、再開できていない。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係把握に努めている。利用者の「好き嫌い」に配慮した支援を行っている。また、独りを好む方への配慮も行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院期間が長くなり、利用中止(契約破棄)になったご利用者様に対しても相談に応じ、必要であれば経過をフォローしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の過ごし方や言動を観察し把握に努めている。担当職員を中心に、ケアマネと協力しプランにし、情報共有している。	思いや意向を言葉で表せる利用者は全体で7人ほどであり、2Fの入居者に多い。意向として話されるのは、新聞チラシを見て果物を食べたいとか、ラーメンを食べたい等のことが多く、なるべく対応している。家族からも本好きである等の利用者の嗜好などの情報を得て、ケアに生かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始前に本人の生活歴を調査した内容(アセスメント)によって、各職員が把握する様になっている。また、日常的な会話の中から情報を得る様にする。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタル測定や排便状況の確認等変化を追うことで現状の把握に努めている。また、3か月に1回位のペースで担当職員が評価(身体機能の評価と認知面の評価)を実施している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月行われるユニット会議で、担当職員とケアマネを中心に、利用者の変化や様子、必要な支援等を話し合っている。 また、変化に応じて都度報告し合い、家族を交えてケアマネの内容を変更している。	介護計画はケアマネが原案を作成し、ユニット会議で検討のうえ決定されている。計画の見直しは3か月毎や6か月毎に定期的に行われており、家族の要望等も取り入れている。モニタリングは担当職員が主に行っており、ユニット会議で検討されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は行っている。職員間の情報交換に関しては、日報等で申し送る。また、毎朝の申し送りでも情報共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の生活状況に合わせてサービス提供を行うように努めている。 家族の支援が難しい場合は、保険外サービス(ほほえみサービス)の提供をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	通常は、家族だけでなく近所の方、親戚など本人が今まで関わってきた方の把握に努め、面会等は柔軟に対応している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用以前の主治医がいる方に関しては、極力主治医を変更しない様な支援をしている。 また、主治医を変更した場合も職員が同行したり、各病院の相談員と連携を取るようになっている。	入居前からのかかりつけ医を受診している方が多く、主に県立久慈病院と北リアス病院を利用している。受診には職員が付き添う場合が多い。看護業務は隣接の小規模多機能ホームの看護師の応援を得ている。夜間の急変時等には、県立病院に救急搬送となる場合が多い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置していないため、適切な看護が受けられているわけではないが、併設施設の看護師に相談可能な状況ではある。 さらに、受診対応に関しては異常があった場合極力早い対応を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した際は、必要がある場合は情報提供(3日以内)を行う。また、退院に関しては各病院の相談員を窓口に関係の方とも連絡を取り退院後の受け入れを円滑に行える様に取り組んでいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所単独では実施していない。しかし、看取りに関しては、数年前より、関連施設が整備された為、「看取り」を希望される方には、そちらも紹介している。	重度化した場合の対応については、入居時に本人や家族に説明し了解を得ている。その際、協力可能な医師がいないため看取は行っていないことも説明している。重度化した場合には、特養施設等への変更や、緊急入院し医療対応となっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応のマニュアルを掲示したり、AEDの講習会を開いている。 また、職員には緊急性を感じたら迷わず119番通報(救急車の要請)するように周知している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年度は11月に、津波を想定し訓練を実施。一昨年には水害を想定した訓練を実施。	従前のハザードマップでは水害時に50cm程度の浸水想定地域であったが、新たに津波の浸水想定が出されたため、昨年11月に津波時の避難訓練を行い、県立病院や東高校へ避難した。火災時には特に2Fからの避難が課題と認識しており、年度内の訓練を予定している。	火災発生時の2Fからの避難に困難を伴うと思われることから、職員が少ない夜間を想定した訓練を実施することにより具体的な課題を把握すると共に、近隣居住の協力者を募ることが望まれます。

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いや人格の尊重は心がけている。また、言葉遣いに関しても、ユニット会議での議題として改善に取り組んでいる。	職員は利用者に対して、苗字に「さん」付けで話すように心掛け、尊厳を大切にしている。失禁時等には本人の羞恥心に配慮して周囲から判らないよう素速く対応し、丁寧な声掛けを行っている。居室にはノックして出入りし、着替え時には周囲から見えないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を尊重し、自己決定できるように支援している。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホームあさひ 1F

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人がその日どのように過ごしたいかの希望に添っている時間帯もあるが、基本的には、日課を取り入れたり、全体的な流れにそった支援をしている。 参加したくないという人の意思は尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	乳液や髪結い、多様な希望に添う支援をしている。身だしなみがちぐはぐにならない様、TPOに合った服装の手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人の好みや能力に応じて提供しているが、苦手な食材がある場合は可能な限り代用品を用意して対応している。また、できる利用者様とは職員と一緒に片付け等を行っている。また、おやつ の買い物や居室での飲食も実施している。	三食とも副食は地域の会社で調理したものに、職員がご飯とみそ汁を作り提供している。利用者の好みでないものは職員が除いている。おやつ作りでは、利用者が好むあずきぱっとやたこ焼き、ホットケーキ等を一緒に作り楽しんでいる。利用者は食器洗いや拭き取りなどを手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の把握は行っている。また、体重測定を行い、体重の変化に応じた対応を行っている。また、水分補給には気を使い、お茶や水だけでなく、経口補水液を作り、身体状況や好みに応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは行っている。なるべく本人で行って頂けるよう促している。 また、口腔内の異常を発見した場合は、都度歯科受診対応等(往診等)を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	介護度が高くなり、介助量が増えているが、トイレ誘導や声がけを行い、なるべくトイレでの排泄を行なって頂けるような支援を心掛けている。	排泄チェック表を活用しながら、しぐさ等も観察しながら適時の声掛けと誘導介助を行っている。布パンツで自立の方が全体で3人、オムツ使用が10人以上、他はリハビリパンツを使用し、徐々に重度化が進んでいる。失禁時等には、特にプライバシーに配慮して周りに気づかれないようトイレに誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の状態(排便の有無)の把握には努めている。飲食物の工夫や運動の働きかけも行っている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	入浴に関しては入浴日を設けて案内している。ただし、一人ずつ入浴しており、洗体を行える方にはなるべく洗って頂いている。	入浴は週2回を基本とし、1Fは月・木、2Fは火・金となっている。機械浴の利用者が多くなっており、隣接の小規模多機能ホームの機械浴槽を11の方が利用している。異性介助を拒否する方が1人おり、希望に対応している。職員との会話を楽しみながら、季節を感じる菖蒲湯やゆず湯も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間(消灯)は設けておらず、その人の生活習慣に応じて就寝して頂いている。また、昼夜逆転の予防としても、可能な範囲で日中活動的に過ごして頂ける様に支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	担当職員を中心に、本人の服薬状況の把握に努めている。誤薬や服薬もれがない様に工夫をしている。服薬に関しての問題点や疑問は、近所の薬局の薬剤師に相談できるように連携している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の生活歴や役割、嗜好品(ヤクルトやコーヒー等)にも努めている。季節感を大切にイベントで気分転換をはかたりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別での外出は、現在出来ていない。バスハイク等が多いが、外出する機会を設けている。外出する機会は、コロナ禍明けに機会を増やす予定である。	コロナ禍は軽減しつつあるものの、利用者の重度化が進み車椅子利用者も多くなり、以前のように多人数での外出は難しくなっている。それでも、少人数での花見や紅葉狩りなどのドライブは継続している。また、近所へのゴミ捨てに職員と一緒に出かけるなどしている。今後は外出機会を更に増やしていく予定にしているとしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望がある方や金銭管理が出来る方に関しては、家族と協議し所持金を管理してもらっている。基本的には、金額は家族に決めてもらうが、高額にならない様に依頼している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	本人、家族の希望に添って対応している。家族の希望に合わせ、随時電話での会話を出来るに支援している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームあさひ 1F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不快感や混乱をまねく可能性があるものへの配慮は行っている。 また、季節感を感じれるような貼り絵や飾り付けを心がけている。	ホールは広々した窓が南向きにあり、JR列車を真近にみられる。ホール内の空調はエアコンにより適切に保たれ、壁面には各月ごとの行事写真が掲示され、天井からは季節感あるハロウインの飾りが下げられている。利用者は職員とともに洗濯物をたたむ手伝いをするなどして過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間で気のあった利用者同士で過ごせるような配慮に努めている。 また、座席やテーブルの配置を配慮し、利用者同士の相性等を尊重して対応している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室へはご自宅で使用していたものを持ち込んでもらったり、家族や本人が希望するものを持ち込んでもらい、少しでも安心できるような配慮をしている。	居室にはベッドと吊り棚、小型の引き出しが備え付けられており、エアコンとパネルヒーターで温度管理がなされている。利用者はそれぞれに、家族写真やカレンダーなどを壁面に飾っているほか、自分の作品を貼るなどして居心地よい空間としている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来ることは危険がない様に見守りをしながら、本人に行っていただけるような支援を心がけている。		